

樺太日本語方言の変容—朝鮮語・ロシア語との接触の視点から—*

まつもと かずこ 松本和子(東京大学)・吉田 さち(跡見学園女子大学)
 たかだ みよこ 高田三枝子(愛知学院大学)・奥村 晶子(東京大学)

1 はじめに

本稿は変異理論を用いた樺太日本語方言の変化に関する研究の途中経過を報告するものである。現在のロシア連邦サハリン島の南部は1905年から1945年まで日本領・樺太として40万人もの日本人が居住する地であった。戦後、多くの日本人が帰国したが朝鮮人との入籍などの理由でサハリンに在留している人々もいる。こうした人々と朝鮮半島への帰国が叶わなかった朝鮮人コミュニティの中で樺太時代の日本語がかりうじて第4世代まで継承されている場合がある。

これまで樺太日本語に関する研究としては、樺太時代に日本語を習得した高齢者数名による日本語の特徴を記述した研究(金 2008・朝日 2012)はあるが、複数世代を対象としながら樺太日本語方言が朝鮮語やロシア語と接触した結果、どのような変容を遂げているかという観点からの調査は見当たらない。本研究はまさにそうした先行研究の穴を埋めようとするものである。

2 樺太日本語話者の変遷

現在のサハリン島はこの百年の間に居住者がほぼ総入れ替えになった歴史を持つ。樺太庁(1905~1941)およびロシア政府の人口統計(2010)によると、樺太時代には最大で40万人の日本人が居住し、サハリン南部の全人口の9割以上を占めていたが、戦後は大陸からの入植者が増加し、2010年時点では大陸ロシア系は40万人を超え、全人口の8割以上を占めるに至る。

一方、朝鮮人は樺太時代中頃から(1925年以降)アイヌ人人口を上回る2番目に多い民族となり、1941年には全人口の4.86%(19,768人)を占めた。戦後多くの日本人が樺太から帰還するなか、様々な理由で残留せざるを得なかった日本人もいた。一方、朝鮮人は残留を余儀なくされていたが、1990年の韓ソ国交樹立によって永住帰国が可能となり、2011年3月までに3,906人が永住帰国を果たした(国家記録院 2021)。2010年人口統計時には朝鮮人は2番目に多い民族として全人口の5.02%(24,993名)を占め、日本人は0.04%(219名)¹のみとなった。こうした人口の割合や政治的変遷を経て、朝鮮人と日本人の関係も大きく変貌したという。樺太時代には少数派の朝鮮人が多数派の日本人社会や文化へ「埋没」していたが、戦後は逆に少数派となった日本人が多数派の朝鮮人社会や文化に「埋没」するという大きな転換が生じたという(中山 2015: 13)。

ペレストロイカ以降は日本との往来が可能となり、日本語話者と接する機会が増えた。しかし近年、高齢化が進み日系人が次々と亡くなっていることから、樺太日本語方言を継承する担い手は日系人よりも朝鮮系の方が数の上では多く、また日系人は朝鮮系のコミュニティに取り込まれているため、樺太日本語方言に朝鮮系サハリン人の影響が加えられた可能性が考えられる。また戦後ソビエト政権下で設立された朝鮮系民族学校も閉鎖され、現在の若年層はロシアの学校に就学するため、ロシア語の影響も考慮すべきであろう。

3 調査の概要

本稿では、2019年9月にユジノサハリンスク市において収集した質問票、単語の読み上げ、談話データのうち、質問票の回答と単語の読み上げデータの一部に焦点を当て、統計分析を行う。

* 本研究はJSPS 科研費(20K00551)およびアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題(移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究)の成果の一部である。

¹ この数字には1年以上サハリンに滞在している日本人も含まれている。2021年6月1日時点のサハリン在住のサハリン日本人会会員は70名(日本サハリン協会 2021)。

調査対象の話者は、かつての日本領・樺太へ移住した祖先をもつ話者 16 名(20 代～90 代の男性 9 名/女性 7 名; 日系 5 名/朝鮮系 8 名/日朝系 3 名; 二世 6 名/三世 7 名/四世 3 名)である。残留日本人の多くが朝鮮人と結婚し、家庭では朝鮮語、それ以外は基本的にロシア語で暮らしていることから、本発表では朝鮮語とロシア語からの転移の可能性のある 3 つの「linguistic variable (言語変項)」を分析対象とした。すなわち(1)/u/の円唇化(例: 宇宙/utyuR/を[ut̪eu:]と発音)(ロシア語の/u/は円唇音[u], 朝鮮語はu/(円唇の[u])と/ɯ/(平唇の[ɯ])が音韻的に対立)(43 語 N=688), (2)長母音の短母音化(例: 豆腐/toRhu/を[toɸu]と発音)(朝鮮語・ロシア語双方とも母音の長短を音韻的に区別しない)(23 語 N=368), (3)/h/の変異(例: ご飯/gohaN/を[goxan](軟口蓋化), [goɦan](有声化), [goan](脱落)と発音)(ロシア語は音素/h/を持たず[g, x]で代替され(渡辺 2011), 朝鮮語は/h/を持つが、語頭では[h], 語中では有声化[ɦ]または脱落する(関 2005))(11 語 N=176), の 3 変項を対象とし、合計 77 語 1,232 トークンを分析する。

分析においては、言語外要因として話者の(1)民族的出自, (2)世代, (3)年齢(85 歳以上/70-60 代/50-40 代/30-20 代) (4)生年(戦前/戦後), (5)性, (6-7)日本語/朝鮮語を話す祖父母との同居の有無, (8-10)配偶者との日本語/朝鮮語/ロシア語の使用の有無, (11-13)日本語/朝鮮語/ロシア語の学習の有無, (14-16)日本語/朝鮮語/ロシア語の自然習得の有無, (17)来日頻度, (18)日本からの来客の頻度, (19)サハリンで日本語を使う頻度, (20-22)日本語/朝鮮語/ロシア語の能力, を考慮する。話者の世代, 年齢, 生年を「apparent-time (見かけ上の時間)」(Bailey 2002)として捉え、樺太日本語方言の変化を考察していく。言語外要因の検証にはマン・ホイットニーU 検定(以下 MWU 検定)とクラスカル・ウォリス検定(以下 KW 検定)を用いる²。言語内要因については次の表 1 に示す。

表 1 各言語変項に対して設定する言語内要因³

言語変項	言語内要因	言語内要因の水準
/u/円唇化	(1)当該拍の位置	①語頭・②語中
	(2)先行音	①唇音・②軟口蓋音・③その他調音位置・④なし(#)
	(3)後続音	①唇音・②軟口蓋音・③その他調音位置・④なし(#)
/R/の短母音化	(1)当該拍の母音	1. 5 種(①/a/, ②/i/, ③/u/, ④/e/, ⑤/o/)
		2. 3 種(①狭母音, ②半狭～半広母音, ③広母音)
		3. 2 種(①狭母音, ②非狭母音)
	(2)先行音	①唇音・②軟口蓋音・③その他調音位置
/h/の変異	(3)後続音	①唇音・②軟口蓋音・③その他調音位置・④なし(#)
	(1)当該拍の位置	①語頭・②語中
		1. 3 種(①/a/, ②/e/, ③/o/)
		2. 2 種(①半狭～半広母音, ②広母音)
	(3)朝鮮語の語彙層	①朝鮮語/u/の干渉が見込まれる漢語・外来語, ②朝鮮語/ɯ/の干渉が見込まれる漢語・外来語, ③どちらが適用されるか不明の語

言語内要因の検証にはロジスティック回帰を用いる。また以上の統計分析の結果を補強するものとして、言語外・内要因を同時に含め、さらに個人をランダム要因とした一般化線形混合モデル(Generalized Linear Mixed Model 以下 GLMM)による検証結果についても加えて示す⁴。

4 分析

² 事前にコルモゴロフ-スミルノフ検定(1 標本 KS 検定)を行った結果、母集団の確率分布が正規性を満たさないためノンパラメトリックな検定が適切であると判断した。

³ /R/の調査語には語頭が、/h/の調査語には狭母音がなかった。

⁴ 本稿では基本的に有意水準を MWU/KW 検定とロジスティック回帰、および GLMM のモデル内での要因の固定効果は $p < .05$ で判定するが、GLMM のモデル決定については $p < .1$ とする。なお本稿の MWU/KW 検定とロジスティック回帰は SPSS (version 27)を、GLMM の計算には R (version 4.0.3), パッケージ lmerTest の glmer 関数を使用した。

4.1 変異形の分布

表 2~4 は言語変項ごとに、出現した全「変異形(variant)」の分布を示している。これを見ると、(1) /u/ の円唇化の生起率は全体的には低いが、語頭では 20% と比較的頻繁に観察されること、(2) 長母音の短母音化の生起率は母音によって違いはあるものの、どの母音でも短母音化は観察されること、(3) /h/ の変異に関しては、ロシア語からの転移で予想された [g] は観察されないが [x] や [k]⁵ は観察されること、また朝鮮語からの転移として予測された語中での [h]・脱落(表中 \emptyset) も僅かながら観察されること、がわかる。以上のことから樺太日本語方言における朝鮮語とロシア語の影響は顕著とまでは言えないものの確実にあると言えそうである。

4.2 /u/ の円唇化

本節では /u/ の円唇化を促し得る言語外・言語内要因を検証する。MWU/KW 検定の結果、(1-2) 朝鮮語・ロシア語の自然習得の有無、また(3) サハリンでの日本語使用の頻度に有意差が認められた⁶。朝鮮語・ロシア語を自然習得し、サハリンで日本語を使う頻度が「ほとんど」、あるいは「全く無い」話者が /u/ を円唇化させる傾向が示された。さらに /u/ が出現する位置ごとに詳しく見てみると、語頭の /u/ は(1-2) 朝鮮語とロシア語を自然習得した話者の方が、語中の /u/ は(3) 朝鮮語を話す伴侶を持つ話者の方がより円唇化させる傾向⁷ が示された。以上の結果は、朝鮮語とロシア語が樺太日本語方言に影響を及ぼしているという予測を支持するものである。

ロジスティック回帰の結果、(1) 当該拍の位置、(2) 後続子音、(3) 朝鮮語の語彙層という 3 つの言語内要因を含むモデルが /u/ の円唇化を予測できることが示された(Omnibus chi-square 44.670, df=3, p<.0005)。ただし、このモデルにおいて有意な貢献が見られた予測因子は(1) 当該拍の位置のみであり(p<.0005, Exp(B)=.018)、語頭の方が語中よりも円唇化しやすい傾向が示された。

GLMM によって円唇化を総合的に予測するモデルを検討した結果、言語外要因としては年齢、日本語・朝鮮語・ロシア語学習の有無、言語内要因としては当該拍の位置を含むモデルが採択された。ただしこのモデルの詳細を見たところ、固定効果として有意であったのは当該拍の位置(p<.001)のみであった。またその固定効果係数は語頭に対して語中で-4.54 で、語頭で円唇化しやすいと解釈できる。以上の複数の統計結果から、/u/ の円唇化には位置という言語内要因が強く関わっていること、そして有意な効果が認められた言語外要因から朝鮮語とロシア語の影響が

表 2 /u/ の変異形の分布 出現数 (出現率)

[u]小計	[u]小計	その他	合計
656 (95.3%)	14 (2.03%)	18 (2.62%)	688 (100%)
[u] 語頭	[u] 語頭	その他	小計
37 (77.1%)	10 (20.8%)	1 (2.08%)	48 (100%)
[u] 語中	[u] 語中	その他	小計
619 (96.7%)	4 (0.63%)	17 (2.66%)	640 (100%)

表 3 長母音の変異形の分布 出現数 (出現率)

長母音小計	短母音小計	連母音小計	合計
290 (78.8%)	52 (14.1%)	20 (5.43%)	368 (100%)
[a:]	[a]	N/A	小計
21 (65.6%)	11 (34.4%)		32 (100%)
[i:]	[i]	N/A	小計
28 (87.5%)	4 (12.5%)		32 (100%)
[u:]	[u]	その他	小計
40 (83.3%)	4 (8.33%)	4 (8.33%)	48 (100%)
[e:]	[e]	[ei]	小計
22 (45.8%)	6 (12.5%)	20 (41.7%)	48 (100%)
[o:]	[o]	その他	小計
179 (86.1%)	27 (13.0%)	2 (0.96%)	208 (100%)

表 4 /h/ の変異形の分布 出現数 (出現率)

[h]	[x]	[g]	[k]
144 (81.8%)	24 (13.6%)	0 (0.0%)	2 (1.14%)
[h]	\emptyset	その他	合計
1 (0.57%)	1 (0.57%)	4 (2.27%)	176 (100%)

⁵ 言語一般に/h/の音素を持たない言語では、多くの言語が有するという意味でより普遍性の高い、同じ調音位置の/k/で代用されることも多い。ロシア語にも存在する/k/で代用された可能性も否定できない。

⁶ (1)朝鮮語自然習得 p=.027; (2)ロシア語自然習得 p=.027; (3)日本語使用頻度 p=.039。紙幅の制限から統計の分析結果の詳細は発表時に提示する。

⁷ (1)朝鮮語自然習得 p=.050; (2)ロシア語自然習得 p=.050; (3)朝鮮語を話す伴侶 p=.025。

示唆されたという点で一致が見られた。

4.3 長母音の短母音化と連母音としての発音

本節では長母音の短母音化の言語外・言語内要因を検証する。また/e/の長母音は連母音/ei/ (例：時計)としても発音されたため、この変異形の諸要因も合わせて検証する。MWU/KW 検定の結果、長母音の短母音化を促し得る言語外要因として(1)日本語の自然習得の有無⁸に有意差が認められ、日本語を自然習得した話者の方が自然習得しなかった話者よりも短母音化させる傾向が示めされた。この少々意外な結果について考えるため、話者の日本語の習得背景を詳しくみてみよう。短母音化した話者は16名中11名で、うち5名は日本人の両親を持つ話者であった。なぜ日本人の両親に育てられた話者が長母音を短母音化するのか。ここで想起されるのは、いわゆる日本語東北方言の「シラビーム方言」(柴田 1962, 現代東北方言の音声状況については大橋 2002)の影響である。すなわち日本語を自然習得した高齢層話者において長母音の短縮が見られるというのには東北方言の特徴の残存の可能性が考えられるのではないだろうか⁹。

ロジスティック回帰の結果、(1)当該拍の母音5種、(2)先行音、(3)後続音という3つの言語内要因を含むモデルが長母音の短母音化を予測できることが示された(Omnibus chi-square=8.417, df=3, p=.038)。ただし、このモデルにおいて有意な貢献をした予測因子は(2)先行子音(唇音/b/ > 軟口蓋音/k/ > others) (p=.024, Exp(B)=.640)のみであり、先行子音が唇音(例：帽子)の場合が最も短母音化しやすく、次に軟口蓋音(例：学校)が他の子音よりも短母音化しやすい傾向が示された。

なお長母音の短母音化全体を総合的に予測するモデルを GLMM によって求めたところ、最終的に投入された要因は、言語外要因では世代と日本語の自然習得の有無、言語内要因では母音の種類であった。このモデルで固定効果として有意(p<.05)であったのは(以下、固定効果の係数を()に示す)日本語の自然習得があること(「ない」に対して2.95)と、広母音であること(狭母音に対して1.81)のみであった。

ロジスティック回帰分析では先行子音の唇音/b/、GLMM では後続音の広母音/a/が検出されたことについては一見食い違う結果のように見える。しかし実際のところ短母音が突出して多く見られた語彙は「おばあさん」「カバー」で、どちらも先行子音が/b/、当該母音が/a/という共通した音環境であった。つまり同一の語を異なる角度から指摘したという解釈ができる。また言語外要因においても MWU/KW 検定の結果と一致し、話者が日本語を自然習得したことが短母音化に最も強く影響していると解釈できる。

次に母音ごとに詳しく要因を見てみると、/a/と/e/の長母音の短母音化に関してはこの全体の傾向(日本語の自然習得)とほぼ一致するが、/i/と/o/の長母音に関してはそれぞれロシア語の自然習得とロシア語を話す伴侶の有無に有意差が見られる。すなわちロシア語を自然習得せず、ロシア語を話す伴侶を持つ話者の方が、そうではない話者よりも短母音化させる傾向¹⁰が示された。この結果はロシア語が樺太日本語方言へ影響を及ぼしているという予測を支持するものである。

さらに/eR/の連母音としての発音を促し得る要因を見ていく。MWU/KW 検定の結果、(1-2)日本語/朝鮮語の自然習得の有無、(3)日本語の学習の有無¹¹に有意差が認められた。家庭で日本語ではなく朝鮮語を自然習得し、後に日本語を学習した話者の方が連母音で発音する傾向が示された。この結果から連母音としての発音は家庭での朝鮮語の自然習得や日本語学習と関わること

⁸ 日本語自然習得 p=.006.

⁹ 日本語諸方言からのその他の影響に関する考察は松本・高田・奥村・吉田(2021)を参照されたい。

¹⁰ 日本語自然習得 /a/ p<.0005; /e/ p=.023; 性 /a/ p=.002; ロシア語自然習得 /i/ p=.035; ロシア語を話す伴侶 /o/ p=.040.

¹¹ (1)日本語自然習得 p=.024; (2)朝鮮語自然習得 p=.008; (3)日本語学習 p=.032.

が示唆された。

そもそも連母音の発音は何に由来するのだろう。『音韻総覧』掲載の地図「(=)エー(本土方言)」(p.13)を見ると「えい」の/ei/連母音としての発音は九州や四国の一部の地域に目立つ現象である。しかし樺太へ渡った日本人の8割は北海道・東北地方の出身者であり、今回見られた連母音としての発音は入植者がもたらした方言の影響とは考え難い。一方、本データが単語リストの読み上げであることから、「とけい」を一文字ずつ読み上げた可能性、つまり学習者の特徴の表れと言えるかもしれない。今後は談話データを用いてこの点を精査していきたい。

ロジスティック回帰の結果、(1)先行子音、(2)後続子音という2つの言語内要因を含むモデルが長母音の連母音としての発音を予測できることが示され(Omnibus chi-square 7.458, df=2, p=.024)。このモデルでは(1)(2)ともに有意な効果が認められた。(1)先行子音が軟口蓋音(例: 毛糸)の場合に最も連母音が発音されやすい傾向(/k/ > others /t, z/) (p=.017, Exp(B)=6.600)、(2)後続子音に関しては破裂音や歯茎摩擦音(例: 冷蔵庫)の方が後続音の無い語、例えば「時計」などの語末よりも連母音になりやすい(/t, z/ > zero) (p=.039, Exp(B)=4.840)傾向が示された。

4.4 /h/の口蓋音化・有声音化・脱落

本節で扱う/h/の変異は、前節までの変項と異なり、各言語が異なる転移をもたらす可能性をもつ言語変項である。MWU/KW 検定の結果、語中/h/の口蓋音化[x]を促し得る要因としては(1)ロシア語の自然習得の有無、一方、語中/h/の声門摩擦音[h]の発音を促し得る要因としては(2)朝鮮語を話す伴侶の有無に有意差が認められた¹²。すなわちロシア語を自然習得した話者の方が口蓋音化させ、朝鮮語を話す伴侶を持たない方が声門摩擦音を使う傾向が示唆された。朝鮮語からの転移となり得る有声音化[ɦ]や脱落の出現数は少なく(各1トークン)、そうした変異形による直接的な影響は今回のデータからは観察されなかったが、日本語の声門摩擦音の生起を促す要因として朝鮮語を話す伴侶を持たないことが示されたことは興味深い。以上の結果は/h/においてもロシア語と朝鮮語が樺太日本語方言に影響を及ぼしているという予測を支持するものであると考える。しかし変異形の数が多く([h, x, k, ɦ, ɸ, b¹³])調査語彙の数が少なかったせいか、[x]などを促す言語内要因は検出されなかった。今後、さらに若い世代のデータ数を増やすなどにより¹⁴、より精緻に分析していきたい。

4.5 進行中の言語変化

本節では見かけ上の時間を用いてどのような進行中の変化が樺太日本語方言に観察され得るかを検証する。全種類の変異形について世代(二世/三世/四世)、年齢(85歳以上/70-60代/50-40代/30-20代)、生年(戦前/戦後)に関する要因でMWU/KW検定を行った結果、(1)語中/h/の[h]出現には世代が、(2-3)/eR/の[ei, e:]出現には生年が、(4-7)語頭・語中/u/の[u, u:]出現および(8)/oR/の[o]出現には年齢差が見られた¹⁵。

まず(1)の[h]に関しては、二世から三世にかけて有意に増加し、四世へは緩やかに増加し続けていることから、サハリンの日本語変種が世代を重ねるごとに日本本土の音声に収斂していく傾向が示された。それとは対照的に(2)の[ei]は戦後生まれで増加、[e:]は戦後生まれで減少する傾向が示唆された。これは日本語を自然習得した後に学校で国語として学ぶという戦前のスタイ

¹² (1)語中[x] p=.036; (2)語中[h] p=.036.

¹³ 「おへそ」を[b]で発音する話者が散見されたが、「でべそ」からの類推と思われる。

¹⁴ 二世の調査対象者は調査時点で85歳以上とすでに高齢であり、調査後に亡くなった方もいる。

¹⁵ (1) [h] p=.046; (2) [ei] p=.032; (3) [e:] p=.022; (4) 語頭[u] p=.011; (5) 語頭[u:] p=.021; (6) 語中[u] p=.013; (7) 語中[u:] p=.028; (8) [o] p=.047.

ルから、近年家庭での日本語の自然習得が不十分となり大学などで学習する傾向とも一致している。すなわち子供が耳から自然習得する場合と異なり、学習者が文字から学ぶ場合「けいと」を一字ずつ読みながら学ぶことから、学習者の日本語へと変化が進む可能性が考えられる。しかし今後日本語話者との交流が増えることによって、長母音へ変化する可能性も無いわけではなく、経過を見守る必要があるだろう。これ以外の(4)~(8)の結果に関しては年齢が下がるとともに出現率が上がる、というような直線的な傾向は見られなかった。激動の一世紀の中で異なる年齢層はそれぞれ異なる経験・言語生活を営んできた。今後はそうした話者の年齢層毎の環境と関連付けながらより詳細に考察していきたい。

5 おわりに

本稿は、樺太時代の日本語がかろうじて移民四世まで継承されている事例を取り上げ、サハリンの地で朝鮮語とロシア語と共存する樺太日本語方言にこうした他言語からの影響が見られるか、見られた場合それを促す要因は何か等を検討した。本稿で分析対象とした/u/と/h/のバリエーション、長母音の短母音化また連母音としての発音のいずれにおいても朝鮮語とロシア語の影響を示唆する結果が得られた。限られた数の話者を基にした本研究結果を直ちに一般化することはできないが、20 世紀初頭に樺太へ渡った日本語の諸方言が一世紀の時を経て受け継がれ、言語接触も加わりながら変容している姿を事例研究として提供できた意義は大きいと考える。とは言え、課題も残されている。朝鮮語で/h/に揺れが見られるのは語中の場合のみであるが、調査語に語中の語彙が少なかった。朝鮮語からの転移となり得る有声化[h]や脱落の出現数が少なかった理由もここにある可能性がある。人口の流動性の高い地域では話者毎に接触の度合いが異なりバリエーションの幅が格段と大きくなる(松本 2016)。サハリンはまさに 40 万人もの人口が総入れ替えされた地であり、限られた数の話者の年齢から進行中の変化を捉えることが困難であった理由もここにあるように思われる。今後、二世以前の調査はさらに難しくなることが考えられるが、三世以降の話者の追加や調査語彙を増やす等して精度の高い分析を目指したい。

参考文献

- 朝日祥之(2012). サハリンに残された日本語樺太方言. 明治書院.
- 上野善道(編)(1989). 音韻総覧. 尚学図書(編)日本方言大辞典 下巻. 小学館.
- 大橋純一(2002). 東北方言音声の研究. おうふう.
- 樺太庁(1905~1941). 樺太庁治一斑・樺太要覧・樺太庁統計書.
- 金美貞(2008). 日本語と朝鮮語の接触について—サハリン朝鮮人 2 世の事例—. 日本語学研究 第 23 号, pp. 15-29.
- 国家記録院(2021). サハリン韓人間. <https://theme.archives.go.kr/next/immigration/Sakhalin.do> (最終閲覧日: 2021 年 9 月 12 日).
- 柴田武(1962). 音韻. 国語学会(編) 方言学概説. pp.137-161. 武蔵野書院.
- 中山大將(2015). サハリン韓人の下からの共生の模索—樺太・サハリン・韓国を生きた樺太移住韓人二世代を中心に—. 境界研究. 第 5 号.
- 日本サハリン協会(2021). 日本サハリン協会とは. <http://sakhalin-kyoukai.com/about/index.html> (最終閲覧日: 2021 年 9 月 12 日).
- 松本和子(2016). 社会言語学の研究動向と方言研究との接点—接触日本語変種の研究を中心に—. 方言の研究 第 2 号, pp. 131-149.
- 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち(2021). 見かけ上の時間を用いた樺太日本語方言の変異と変化. 日本方言研究会第 113 回研究発表会発表原稿集.
- 関光準(2005). 韓国語(朝鮮語). 日本語教育学会(編) 新版日本語教育事典. p.45. 大修館書店.
- 渡辺裕美(2011). ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点—日本人日本語教師に対する調査から—. 国際交流基金 日本語教育紀要 第 7 号, pp. 71-84.
- Bailey, Guy (2002). Real and apparent time. In J. K. Chambers et al. (eds.), *The handbook of language variation and change*, 312-332. Oxford: Blackwell.
- Russia Census (2010). Itogi vs Rossijskoj perepisi naseleniya 2010 goda v otnoshenii demograficheskikh i sotsial'no-ekonomicheskikh kharakteristik otdel'nykh natsional'nostej. http://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/roc/results2.html (Accessed: 2018-09-20).